第69回 憲法を考える映画の会

憲法映画祭2023

手元資料

■日時　2023年４月29日（土・休）10時～18時
　　2023年４月30日（日）　　9時30分～20時30分
■会場　武蔵野公会堂ホール（吉祥寺駅南口）

■当日のプログラム

4月29日（土）開場：10：00
1日目〈孫や子と見る 戦争・平和について考える映画〉
10：30　映画　「はだしのゲン」(107分)
13：10　映画　「対馬丸 さようなら沖縄」（70分）
14：30　映画　「うしろの正面だあれ」(90分)
16：20　映画　「少女ファニーと運命の旅」(96分)

4月30日（日）開場：9：30
2日目〈戦争をするとはどういうことか〉
10：00　映画　「ジョニーは戦場へ行った」(112分)
13：00　映画　「沖縄 うりずんの雨(改訂版)」（148分）
15：40　講演　「憲法9条というリアリズム」
早稲田大学教授 愛敬浩二さん
16：40　映画　「教育と愛国」(106分)
18：30　映画　「ある戦争」（115分）

■手元資料 目次

資料❶　**憲法映画祭2023と憲法を考える映画の会**について
資料❷　映画『**はだしのゲン**』について
資料❸　映画『**対馬丸 さようなら沖縄**』について
資料❹　映画『**うしろの正面だあれ**』について
資料❺　映画『**少女ファニーと運命の旅**』について
資料❻　映画『**ジョニーは戦場へ行った**』について
資料❼　映画『**沖縄 うりずんの雨(改訂版)**』について
資料❽　映画『**教育と愛国**』について
資料❾　講演「**憲法9条というリアリズム**」レジュメ
資料❿　映画『**ある戦争**』について

憲法を考える映画の会

〒185-0024
東京都国分寺市泉町3-5-6-303
TEL & FAX：042-406-0502
ホームページ：http://kenpou-eiga.com/
E-mail：hanasaki33@me.com

資料❶　憲法映画祭2023と憲法を考える映画の会について

【「憲法映画祭2023」のよびかけ】

「憲法を考える映画の会」も今回で69回目、憲法記念日を前に憲法をみんなで考える「憲法映画祭」も7年目です。
今年2023年、私達は今までにない改憲の危機に直面しています。昨年の衆院選によって改憲勢力が伸び、4年目を迎えたコロナ禍は「緊急事態条項」の口実にされ、台湾有事論やウクライナ・ロシア戦争が、自衛隊の軍備増強の口実にされようとしています。アメリカと共に戦争をする準備が着々と進められているように感じます。
そうした中で私たちは「**『戦争をする』とは、どういうことか？**」を、二つの側面から考えていきたいと思います。

1日目（4月29日）のテーマ
「孫や子と見る戦争と平和について考える映画」

私たちが「戦争」をイメージする時に思い浮かべるのはどのような映像や画像でしょう。それらの中には、子どもの頃見た戦争の映画もあると思います。
戦争は嫌だ、戦争なんてしたくない、戦争を止めなければ大変なことになる。そう思った映画を、今の子どもたちや、若い人たちと一緒に見てみましょう。それは私たち自身、反戦への思いを新たにすることになることでしょう。
今回、孫や子と戦争や平和について少しでも考えたり、話し合ったりするきっかけは出来ないものかと「孫や子とみる映画会」を企画し、4つの作品を選びました。

2日目（4月30日）のテーマ
「戦争をするとはどういうことか」

安保関連3文書が閣議決定され、日本の参戦が決して荒唐無稽なストーリーではなく、日に日に現実化していることに危機感を持っています。とくにロシアの軍事侵攻に対し、停戦ではなく武力抵抗を煽る風潮、そして「自分の国は自分で守らねば」という声がリベラルの中からも聞こえるようになり、世論調査でも改憲賛成派が護憲派を逆転するなど、日本が危険な方向に向かっているのを危惧します。
直接戦争を経験してはいないものの、平和の尊さや反戦を叩き込まれた世代として、こんな日が来ると夢にも思いませんでした。自分ばかりでなく若者や子どもの命をかけてまで守るべき「国」とはいったい何なのか、今一度考えてみた方がいいのではないでしょうか。

【「憲法を考える映画の会」について】

今年4月「憲法を考える映画の会」は10年目を迎えました。
第二次安倍内閣が成立し、改憲を声高に言い出した10年前、私たちは、その危機感からこの映画会を始めました。

その第1回の「憲法を考える映画の会」のチラシの裏面に**「私たちはこんな会にしたいと思っています!」**という以下のような呼びかけがあります。

・私たちは、より多くの人びとが憲法について、映画を見て一緒に考え、話し合う場をつくり、拡げていきたいと考えています。
・私たちは、「映画の会」に来た人や映画の会に関心を持った人に、一緒に準備をしたり活動をすることを呼びかけます。
・私たちは、こうした映画を使って考える会を、同じような気持ちでいる人が、どこでも、誰とでもつくれるように映画会の拡がりをめざします。
・そうした「映画の会」が開けるような「上映会マニュアル」を作ります。
・私たちは憲法をはじめ戦争や原発や人権の問題を考えていけるような「映画リスト」を作って配ります。
・そして、同じような気持ちでいる人が、それらの映画を利用して、あちこちで 「映画と話し合いの会」 を開き、一緒に考え、話す場が作れるようにします。

↑→第1回憲法を考える映画の会の案内チラシ（2013年4月6日）

↗
この10年間に、「**憲法を考える映画の会**」として上映会を69回、テレビドキュメンタリー作品など有料上映が難しい作品も見ることができるようにした**「憲法を考えるちいさな映画会（試写会）」**を8回、自主制作で映画を作る人たちと自主上映をする人たちを結びつける**「自主制作上映映画見本市」**を9回行ってきました。
憲法を考える映画の会に参加した人が、それぞれの地元で始めた「**憲法を考える映画の会@中野、@立川、@所沢、@国分寺**」なども11回あります。これらを合わせると計96回の上映会を行なって、それらはそれぞれ続いています。

次回70回の「憲法を考える映画の会」を7月に予定しています。（6月は会場がとれなかったので7月に延期しました。日時、会場、プログラムが決まり次第、ご案内します）

第10回目の**「自主制作上映映画見本市」**のために、5月20日、文京区民センター２A会議室を予約していますが、こちらもまだプログラムが決まっていません。

「憲法を考える映画のリスト」2023年版を編集中です。

・2年に一度改訂版を出している**「憲法を考える映画のリスト2023年版」**を、この「憲法映画祭2023」に間に合わせて制作を予定していましたが遅れてしまいました。

・次回の「映画の会」を目標に作っていきたいと思います。
・今回はとくに、誰もが自分達で上映会を行うことができることを目指して、そうした作品紹介のリストにしていきたいと思っています。
・ご希望の方は、「憲法を考える映画のリスト 2023年版」を上映会参加票（アンケート）にその旨、ご記入ください。
・また、これからの上映会の案内をメールでお送りしますので、メールアドレスも、ご記入ください。

↗

資料❷　映画『はだしのゲン』について

【映画の解説】
戦争のばかたれ、原爆のばかたれ。ひとりぼっちのわんぱくゲン、駈けよ、生きぬけ、何ンにもめげず！(映画のキャッチコピー)
原爆の悲惨さ、恐ろしさをまざまざと刻みつけて大きな反響を呼び起こし、世界的ベストセラーとなった中沢啓治原作「はだしのゲン」の映画化。
1945年（昭和20年）8月6日、午前8時15分。ゲンは学校へ行く途中だった。空襲警報が鳴らないまま市内上空に飛来した新型爆弾を投下した直後、強烈な白い閃光が走り、続いて巨大なきのこ雲が一気に広がった。ゲンは運良く助かったが、街は猛火と黒煙の中、その姿を一変させていった。
（DVD「はだしのゲン」ジャケットの解説文より）

【映画を見て】
「あなたが戦争のことを何で知りましたか」という世論調査で圧倒的に『はだしのゲン』が1位になっています。
今年の2月「広島市内の小中高校で平和教育に使われている教材のうち、漫画『はだしのゲン』が23年度から別の教材に差し替えらえることが判明した」と言うニュースが流れました）。
2014年3月にも「はだしのゲン」を大阪府泉佐野市の教育委員会の学校図書館から回収する事件が起きています。戦争に向かおうとする勢力にとっては、戦時中の真実を子どもに見せたくない、目障りな作品なのでしょうか。

私はこの映画は、原爆の悲惨さを訴える作品と思い込んでいましたが、意外にもその原爆に至る大半の部分は、戦争中、戦争に批判的なことを口にしたため、周りから迫害される家族の話が描かれています。
戦前の1930年代から大東亜戦争に至る過程のなかで、治安維持法などによる思想・言論弾圧が戦争への道を作ったことを描いた映画はいくつもあります。
しかし、この映画では、ごく普通の市民が戦争に反対する言葉を口にしただけで、どのように「非国民」のそしりを受け、社会から排除されていくかが描かれています。とくに子どもの視点から見ているので、近所のおじさん、おばさんから、学校の教師から、そして同級生の子供たちからまでも、「非国民」よばわりされ、嫌がらせ、いじめられ，分断され、孤立していくかが描かれます。そうした社会というものが、いかに怖いものかが、ひしひしと肌身に感じられます。
原作者中沢啓治さんは、「このマンガで訴えたかったのは、単に反戦というメッセージでは無く、それでも負けずに明るく振る舞うゲンの姿に『踏まれても、踏まれても逞しい芽を出す麦になれ』という『生きること』への肯定の意味を込めて『人間愛』を最大のテーマとして描いた」と語っていますが、この映画を見ていると，その追い込まれていく実感が生々しく、このような圧迫を受けたら、自分だったらとても耐えられないだろうな、正直なところ、すくみ上がってしまって、思ったことも言わないようにしようとするのではないかと想像してしまいます。

しかしそうした萎縮した、それも自己規制する意識は、すでに、今の私たちの中にもあるのではないか、とまた考えました。「それはおかしいな」と思っても、自分の考えを口にすること自体がためらわれるとか、多勢に同調しないと近所の目が怖いとか、子どもが虐められるとか、教師が言っていることには逆らわず従っていた方が得だか、といろいろ言い訳をして問題にならない方を選んではいないでしょうか。
そうした自分のもっている気の弱さの問題とともに、私たちの、今、置かれている情況について考えましょう。戦争への道と言うことを考えたときに、もはやとても危機的な状況にあることがすぐわかると思います。

「台湾有事」であるとか、敵基地攻撃能力を持った兵器整備とか、世界情勢が一触触発の緊張の情況であるかのような煽り方がされ、どんどんどんどん実質改憲と自衛権の拡大解釈が進められます。

そして軍事同盟を実行するための軍備増強が進められます。それに対して、正しく情報を得て、その危機についてきちんと分かりやすく、より多くの人に説明するような報道がされているとは思えません。多くの人が「おかしい」と思いながらその声は伝わりません。
もし局所的にでも衝突が起き、自衛隊員が負傷または戦死するような事態が起きたら、それでも、その戦闘に反対し戦争を止める主張を続けられるのだろうかと思ってしまうのです。
同調圧力どころじゃない大きな波に飲み込まれてしまいます。それも10年に一度は戦争をし、仕掛けてきた国と軍事同盟を結び、世界どこへでも自衛隊員を向かわせて戦いに加わる約束してしまって、その訓練をして挑発し、軍備を増強させているのが今です。実質的に憲法9条の「専守防衛」を捨ててしまっている国家ですから、明日にもそうした「有事」が起こると考えるのが当然でしょう。
その時、何と声を上げるのでしょうか。「おかしい」「おかしい」と思いながら、何も言わないでいる自分があるのではないですか。そうして同じことをまた繰り返して行くのではないですか。映画『はだしのゲン』を、今の時点、作られてから50年近くなった今見て、そのような今の自分たちの意識の中の危険と今私たちがおかれている情況の危険を考えました。

戦争を知る世代の人がいなくなってしまうと言われますが、戦争に至った社会のことを知る人も少なくなってきています。そして「どうして戦争を止めることができなかったのか」について、ずっと考えてきた人もまた少なくなっていってしまいます。
この映画を一緒に見て、一人一人の中にある弱さ、その弱さが、今の社会が作っていることについて、また、そうであっては、戦争への道を止めることができないことを、みんなで考えていけたらと思っています。

（シネマde憲法2023年1月16日『はだしのゲン』より）
https://www.jicl.jp/articles/cinema_2023016.html

はだしのゲン

原作：中沢啓治　脚本・監督：山田典吾
出演：三國連太郎 左幸子 佐藤健太 石松英和 岩原千寿子
1976年公開／107分／日本映画／劇映画
上映問合せ：共同映画株式会社　TEL:03-6434-9346

資料❸　映画『対馬丸 さようなら沖縄』について

【作品の解説】
　昭和19年8月21日、沖縄の本土疎開学童八百余人を乗せた対馬丸が、曇天、時々スコール、さらには台風の接近という中、出航。そして翌22日、船は米軍潜水艦に発見され、魚雷攻撃の末、沈没。学童の生存者はわずか五十九人。その事実は軍部により闇から闇へ葬られ、二ヶ月後、米軍の沖縄攻略作戦が本格化していった――。（映画.com『対馬丸 さようなら沖縄』ストーリーより）

【映画を見て】
　私は「対馬丸」の悲劇があったことを、このアニメーションで初めて知りました。今回、この映画を試写で見て、単に「戦争でいのちを失った可哀想な子どもたちの話」というだけでなく、その事実が軍部によって闇に葬り去られ、生き残った子どもたちが「何があったのかを話したら銃殺」と脅されて苦しんだことも描かれていることがわかりました。
　沖縄の人たちは二重の意味で二つの国の軍隊によって痛めつけられてきたことがわかりました。沖縄ではそれが戦後も、そしてこれからも続いていくことなのでしょうか。

　この作品を「トラウマ・アニメ」という人がいるそうです。たしかにシンプルで愛らしい表情の子どもたちのキャラクターが、次々と海に消え、あるいは血まみれになって死んでいくのですから。しかしそれは実際にあったこと、「それが戦争」とアニメは教えます。「どうしてこんなことになるのだろう？戦争って何なのだろう？」子どもは考え始めるでしょう。
　映画のラストのローリングタイトルで示される対馬丸の全犠牲者の名前と学年（歳）、そのほとんどが小学生。圧倒されます。胸に迫ります。
　アニメーションの中で跳ね回って遊んでいた、未来に希望を持っていた清や健治や勇たちが，みんな同じように実際に「生きていた」ということ。この延々と続くタイトルは、それを否応なく思い起こさせます。彼らの悔しさがわき上がってきます。戦争によって子どもたちも大人も、人々はなすすべもなく、こうやって殺されていったと言うことにあらためて気付かされます。そうした戦争は今も続いていて，終わる気配もありません。どうしてなのでしょうか。

　それとともに憤慨するのは、対馬丸をはじめ、こうした戦争の被害の事実が、軍部の不都合を隠すために隠されたことです。憲兵隊によって、「対馬丸のことを話したら銃殺だ」と脅され、何も言えなくなった清の表情。身体だけでなく子どもらしい感情や心をも壊していくのが軍隊です。こんな軍などなくなってしまえ。

　この作品の制作は1982年。私は、この映画が出来たことで、隠されていた対馬丸の事件があったことをはじめて知りました。そして他にも多くの戦争の事実が隠されているのだろうと思って、知りたい、知らなければと思いました。

　「トラウマ・アニメ」と言う言葉から、沖縄戦を経験した高齢の人たちに「戦争のトラウマ」による精神的な傷害が多数、現れていることに思い至りました。
　沖縄で戦争を体験した人たちが、老年期を迎えて、その記憶の奥にしまい込んでいた戦争の苦しみが表れて、心身症状に表れて再び苦しめられていることです。（蟻塚亮二「沖縄戦と心の傷」大月書店）など）
　きっとこのアニメーション映画で生き残ったあの子どもたちも、そうした苦しみを抱えて生きてきたことでしょう。そしてその沖縄の人たちが、戦後もずっと戦争に近いところに置かれ、今また戦争の危険に一番近いところに置かれ続けているのです。

　今の子どもたちや孫たちの次の世代は、こうした映画を見てどのようなことを考えるのでしょうか。言葉では説明しきれないことも、「なぜ？」と言う気持ちをもってくれれば、そこから考え始めてくれればと思っています。
　トラウマになるという言い方で、子どもたちにはなるべく残酷なものや死に関わるものを見せてはならないとする意見があります。原爆の悲惨さを伝えるときなどそうしたことを言われます。私も気持ちとしては、同じように考えます。無垢な、可愛らしい子どもたちにそんなものは見せたくありません。できれば何も知らない明るいままで大きくなってほしい。

　でも、それが見せないことで隠すことに利用されているとき、同じような間違いを繰り返さないようにするためにも、事実を伝えていかなくてはならないと思います。難しいことではありますが、できれば、一緒になって考えていきたいと思います。私たちが子どもの頃、戦争のことを話してくれ、「絶対に戦争は良くない」と考えるようにしてくれた大人がいるように。
　こうした作品の作り手の願いが、どのようなところにあるかを感じながら、出来れば子どもや孫たちと話しながらこうした映画を見ていきたいと思います。
（シネマde憲法2023年3月13日『対馬丸 さようなら沖縄』より）
https://www.jicl.jp/articles/cinema_20230313.html

対馬丸 さようなら沖縄

原作：大城立裕
監督：小林治
プロデューサー：伊藤正昭、宇田川東樹
企画：映画センター沖縄連絡会議
声の出演：田中真弓 丸山裕子 安達忍 納谷悟朗 熊倉一雄
1982年制作／70分／日本映画／アニメーション
上映問合せ：シネマワーク　TEL:075-331-7820

資料❹　映画『うしろの正面だあれ』について

【かいせつ】

1991年に製作公開されたこの作品は、下町のエッセイスト海老名香葉子さんが、少女の頃の痛恨の体験をつづった本「うしろの正面だあれ」(金の星社)が原作です。

かよちやんが生まれた本所堅川三丁目、現在の墨田区を舞台につりざお職人の質素ながらも温かい家庭と、下町の暮らし、子どもたちの遊びなどが、かよちゃんの成長とともに描かれています。

そして戦争の時代。かよちゃんは1945(昭和20)年3月の東京大空襲の炎の中に、最愛の家族６人を奪われます。しかし、「かよこは、明るくて人に好かれる子だから大丈夫」というお母さんの言葉を胸に、絶望と孤独の中から立ち上がってゆくシーンでエンディングを迎えます。

戦争の悲惨さとともに、愛情こそが子どもの生きる力となることをあたたかく描いた作品です。

この映画は、落語家の故林家三平師匠の夫人で、現在はエッセイストとして活躍する海老名香葉子さんが少女期の体験を児童用に書き下ろした「うしろの正面だあれ」が原作になっています。

アニメーションの制作は、練馬区富士見台にあった虫プロダクション。監督は、『つるにのって』『えっちゃんのせんそう』『NAGASAKI1945アンゼラスの鐘』などの有原誠治。

美術監督は「ルパン三世　カリオストロの城」の小林七郎氏。

声優は「パーマン」パーマン1号の三輪勝恵さん、「銀河鉄道999」メーテルの池田昌子さん、「ドラゴンボール」悟空の野沢雅子さんを迎えた豪華キャスト。

海老名さんの息子、9代目林家正蔵さんも声の出演を果たしています。

【ものがたり】

1940(昭和15)年、東京の下町本所堅川三丁目の路地には、子どもたちが遊び、物売りの声が行き交います。

つりざお職人「竿忠」の家には、江戸っ子の父ちゃん、働き者でやさしい母ちゃん、ちょつときびしいおばあちゃん、妹思いの三人のお兄ちゃん。そして、一年生になったばかりのかよちゃんの７人が、なかよく暮らしていました。

かよちゃんは泣き虫で、ときどきオネショの失敗もしますが、弟の孝ちゃんが生まれてからは、しっかりもののお姉ちゃんになりました。

そして1941(昭16）年の12月。日本は太平洋戦争に突入。学校も子どもたちの遊びも、町の暮らしも戦争一色になりました。

1944(昭19)年になると、東京の空にも米軍の重爆撃機B29が現れるようになりました。かよちゃんは学校のすすめで空襲を避けて疎開をすることになり、ひとり沼津のおばさんの家にお世話になります。

そして、1945(昭和20)年の3月9日の夜。沼津の山から真つ赤に染まった東京の空を目撃したかよちゃんは、家族の無事を必死に祈るのでした。

【原作者から】

「私のアニメーションは1991年に出来ました。原作は大人になった私、海老名香葉子です。

私の生まれは東京の下町、本所堅川三丁目。現在の墨田区。やさしいお母さんとお父さん、三人の兄たち、そして、ちょっぴりこわいおばあさんたちに囲まれて育ちました。

ところが10歳になったときにおそろしい東京大空襲があって・・・あとはぜひ、アニメーションをご覧くださいね！」

中根かよ子（8歳）の家は5代続いた釣竿づくりの『竿忠』。大家族の暖かな愛情に包まれて、かよ子は明るく育っていきます。

昭和16年12月8日、日本は太平洋戦争に突入。町には出征兵士を見送る光景が見られ始める。日を追ってB29爆撃機の来襲が頻繁になり、かよ子はたった一人で沼津のおばの所へ疎開をすることに。

昭和20年3月10日、沼津で箱根の山ごしに真っ赤に燃える東京の空を見たかよ子は…。

うしろの正面だあれ

原作：海老名香葉子「うしろの正面だあれ」
監督：有原誠治
声の出演：三輪勝恵・池田昌子・野沢雅子・若本規夫ほか
【主題歌】「愛はいつも」　唄：白鳥英美子
1991年制作／90分／日本映画／アニメーション
上映のお申し込み：KOSEIアニメ普及委員会
https://tybettan.wixsite.com/animation/form

資料❺　映画『少女ファニーと運命の旅』について

【あらすじ】

1943年、ナチス・ドイツ支配下のフランス。13歳のユダヤ人少女ファニーは幼い二人の妹と共に協力者たちが秘かに運営する児童施設に匿われていたが、密告者の通報により、別の協力者の施設に移った。しかし、その施設にもナチスの手が伸びてきたため、さらに別の協力者の施設に移ることになる。
ファニー達は列車を使って移動しようとするが、ドイツ兵による厳しい取り締まりのせいで引率者とはぐれ、見知らぬ駅で8人の子供たちと共に取り残されてしまう。
もともと勝ち気さを内に秘めていたファニーはいつしか子供たちのリーダーとなって、いくつもの窮地を勇気と知恵で乗り越え、ひたすらスイスの国境を目指すのだった。
（wikpedia：映画『少女ファニーと運命の旅』あらすじより）

【映画を見て】

ファニー達、9人の子どもたちは、その逃避行の中で、さまざまな大人たちに出会います。子ども達を命懸けで助ける大人がいる一方で、子どもたちを平気で騙す大人もいます。
どうして子どもをこんな目に遭わせてまで戦争をするのか…。この話から80年たった現在も、戦争によって多くの子どもたちがいのちの危険にさらされていることです。そして、私たちにもその戦争の危険はますます強まっています。

この映画のひかれ、「いいな」と思うところは、戦争という非常で、非情な情況の中にあっても、子どもたちの描き方がとても素直で、自然なところだです。子どもの力というものを信頼していると感じられるのです。
結果的に子どもたちのリーダーとなるファニーにしても、はじめからしっかり者だったわけでなく、すぐに弱音を吐いたり、駄々をこねたりする13歳の少女に過ぎません。それがとてつもない危機をくぐり抜けていく中で、自分の役割を自覚し、強い意志を持っていく、その過程に感動します。そしてファニーと一緒に「運命の旅」をする子どもたちも一人一人が子どもらしく描かれています。戦争の中にあっても。スキさえあれば遊ぼうとする、笑顔になる。その無邪気さにほっとします。子どもたちが見ても、自分たちも同じだと共感を感じるのではないでしょうか。
子供の目線から描いているので、悲壮感を感じるよりは、冒険をしてるような感覚にもなります。遊びさえすれば、元気になる小さな子供たちのエネルギーに救われます。
前知識も持たずにこの映画を見始めたのですが、途中で、この映画の作り手、監督は女性かなあと思いました。女性、それも子どもの感じ方をよく知っている子どもたちに近い世代で、子どもの視点を守って描いていくことで、とくにリーダー、ファニーの内面の動きと変化を細やかに捉えることができたのだと思います。

私たちは、「憲法映画祭2023」のテーマに「子どもと一緒に見る戦争の映画」と言うことを掲げました。それは、「子どもに見せたい」と言う意味だけではありません。私たち自身、戦争を知らないことに変わりはないからです。

私たちが子どもだった時に、戦争を経験した親の世代の大人達は、戦争のことを私たちにもっともっと伝えようとしていたのではないでしょうか。本を読んだり、映画を選んで見せたり、あるいは戦争を語り伝える。そこで「戦争はいけない」「戦争を許さない」と話してきたと思うのです。そうした気持ちを私たちは子どもたちに孫たちに伝えているでしょうか。戦争の話を言い出して、議論するのもなあ、と戦争の話などしないままになってしまっているのではないでしょうか。

こうした戦争を描いた映画を見る時、とくに作り手が戦争の何を伝えようとしてそれぞれの映画を作ったのか、考えることが大切なのではないかと思います。そういった意味で、子どもたちと一緒に見て、大人達にこそ考えてほしい、そのような映画の会になればと思うのです。

子どもがどのような反応を示すのか、子どもから教わりながら自分たちのために考えて行く映画会にしたいと思うのです。
おそらく今回の憲法映画祭の「戦争と平和を考える映画」、見終えた時、子どもたちにとっては、理解できないことがたくさんあると思います。「なんで戦争は起きたの?」「どうしてそれをとめることはできなかったの？」そうした疑問をまわりの人たちと話し、自分の中に疑問として持ち続け、一緒に考えるきっかけになればと思っています。

子どもと一緒に見る子どもの目で見た「戦争」の映画、一つは比較的最近の作品で、出来るだけ前向きな気持ちになれる映画をと選ばれました。この映画は、ナチスの追っ手から逃れての子どもたちだけの逃避行、いくつもの危険に遭いながらその中で子どもたちがだんだん強くなっていくところが前向きで頼もしく感じられます。
（シネマde憲法2023年4月24日『少女ファニーと運命の旅』より）

少女ファニーと運命の旅

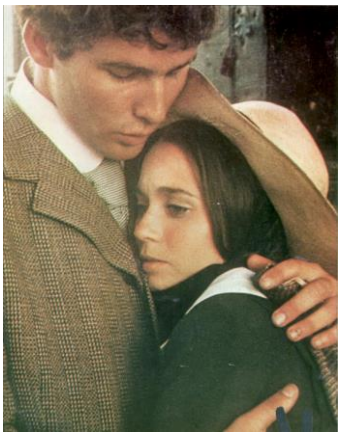
監督・脚本：ローラ・ドワイヨン
脚本：アン・ペイレニャ
原作：ファニー・ベン＝アミ
出演者：レオニー・スーショー　セシル・ドゥ・フランス
2016年製作／96分／フランス・ベルギー合作映画
上映貸出：東北新社　TEL：03-5414-0441

資料❻　映画『ジョニーは戦場に行った』について

【映画の解説】
　戦場で両手、両足、耳、眼、口を失い、第1次世界大戦が終わってから15年近く生き続けたイギリス将校が実在したという事実をヒントに、ダルトン・トランボが1939年に発表した小説「ジョニーは銃をとった」を、トランボ自ら脚本・監督した反戦映画。なお1971年カンヌ映画祭審査員特別賞、日本でも72年度芸術祭大賞を受賞した。
（映画.com『ジョニーは戦場へ行った』より）

　YouTubeで、この映画の公開当時（1972年）の予告編をみることができます。
https://www.youtube.com/watch?v=9Rn6VdF55P
その中からから
「腕があれば自殺できる
　足があれば逃げられる
　声があれば叫んで救いを求められる」
（横たわるジョー）
「目がない」「目も、口も、歯も、舌も、鼻も」
「顔に何もなくただえぐれている」
「こんな僕が生きている」
（軍用列車で出征するジョーを駅頭で見送るカリーン）
「神さま　お願いします」
　「彼を行かせないで下さい」「殺させないで下さい」
（横たわるジョーの胸元に落ちた涙）
「濡れたものが落ちた　何だろう」
（父に質問する少年ジョー）
「民主主義って?」
「どの政治も同じで、若い者が殺し合うことに関係がある」
若者は死ななかった　ただの肉塊になって　それでも生き抜いた“赤狩り”に耐えて数々の名作を書いた執念の鬼才、ドルトン・トランボが、念願のテーマをはじめて自ら監督
「そうだ、もちろんそうだ、やっと分かった」「これは太陽だ」
限りない　いのちの賛歌　そして――巨大な愚行（戦争）に向けた怒りのアピール！
「モールス信号です」「ＳＯＳです。“助けを”です」
「ぼくを見世物にして金を取るんだ」「頭で話をする肉の塊りだと広告しろ」「それで客が入らなきゃ、軍隊が人間を作ると信じた最後の男だと言え」
「生きることの悲哀をこれほど衝撃的にしかも美しく描ききった作品に私は初めて出会った」熊井啓（映画監督）
「これを越える作品は将来とも現れないだろう。これは神の作品だ」岡本愛彦（映画監督）
「この映画については何も話したくないし、何も喋りたくない。ただ一人でも、一人でも多くの人に見てもらいたい」橋本忍（脚本家）

　高校生時代、この映画のジョーの置かれた情況を聞いただけで、とてもショックを受けました。
　「自分がそのようになったらどうするか」「生きているとしても、自分の記憶にあることでしか生きられないということか」「もし自分がそういう情況に置かれたらどんなに無惨な気持ちになるだろう」
　「生ける屍」と言う言葉がありますが、死の恐怖とともに、「死ねない恐怖」ということについても考えさせられる映画でした。
　そこにあるのは、意識だけの人間であり、意識だけしか無い人間です。そして意識というものがどんなに貴重な輝かしいものになるだろうか、と考えさせます。
　さらに、戦争は、幾多の若者を殺し、傷つけ、負傷させ、おそらくそのような若者が数限りなくいたことを考えさせます。こうした人間が作られたのは、ほかでもない。この青年には、全く関係の無かった戦争であると言うところに、この作品のテーマが明確に浮かび上がっていき、それが反戦の訴えとなって、しみじみと呼びかけてきます。



　この映画の優れている所はいくつもありますが、とくに三つ、強く感じるところがあります。
　一つは「表現の巧みさ」です。横たわるジョーの戦後15年の現実を描いているモノクロの場面と、彼の頭に浮かび上がった想念と記憶、それらに対する彼自身の「思索」の世界を表すカラーの場面が、交互に表れます。彼の置かれている苛酷な情況は、戦争の非人間性を浮き彫りにするとともに、観客は切実に、ジョーの身に降りかかったことを自分のこととして感じることになります。
　もうひとつは、作り手の「戦争への怒り」の強さです。あんなにまで、青春の輝きに満ちあふれ、恋人との愛情も確かめることの出来た肉体が、戦場で引き裂かれた、ということへの怒りです。若者を戦争に向かわせているもの、国家に怒りを露わにします。
　ダルトン・トランボ監督は、「（ベトナムの道々が血のゴボゴボ流れる下水溝になっても、アメリカの国内は安全なのだ。）もっともその血は、来る年も来る年も我々が自分の息子たちに『ここで刑務所に入るか、あちらで棺に入るか』の選択を強いることによって、絶えずつぎこんでいるものなのである。『国旗を仰ぐたび、わが眼には涙が湧く』と人は歌う。私の眼もだ」（映画『ジョニーは戦場へ行った』パンフレット「原作・脚本・監督ドルトン・トランボの言葉」より。
　しかし、陰々滅々とした気持ちになるだけでは終わりません。極端で、無惨な情況の中に置かれながらも、主人公ジョーが「死とはどういうことか」「生きるとはどういうことか」考えることを経て、取り戻すみずみずしい生命への賛歌を私たちも共にすることができます。ヒューマニズムにあふれたそれは、私たちを希望に導いてくれるものになります。
　人間としての存在の最後の一片を、人間性のあかしとして、消えようとする灯を守るように必死に守り通す兵士ボナムの中に想像することが出来ます。まるっきり“物体化”した人間が、人間そのものに復活していく様を見つめていく感動があります。
　反戦を訴えていく時、戦争が自分たちの問題であり、自分たちが作り出しているものであることを認識し、考えるところから始めなければ伝わるものにならないと言うことを、この映画は教えてくれます。
（シネマde憲法2023年4月17日『ジョニーは戦場へ行った』より）
https://www.jicl.jp/articles/cinema_20230417.html

ジョニーは戦場へ行った
原作・脚本・監督：ドルトン・トランボ
出演者：ティモシー・ボトムズ　キャシー・フィールズ
ドナルド・サザーランド　ダイアン・ヴァーシ
1971年制作／112分／アメリカ映画
上映貸出：MMC：https://mmc-inc.jp/j-contact/

資料❼　映画『沖縄 うりずんの雨（改訂版）』について

【映画の解説】

「映画　日本国憲法」のアメリカ人監督ジャン・ユンカーマンが、太平洋戦争で多大な犠牲を払い、戦後70年を経た現在も平和を求めて不屈の戦いを続ける沖縄の人々にスポットを当てたドキュメンタリー。

当時の戦場で向き合った元アメリカ兵と元日本兵、沖縄住民の証言を中心に、アメリカの国立公文書館に所蔵された資料映像などを交えながら、12週間の地上戦で4人に1人の住民が命を落とした沖縄戦の真実に迫る。

さらに、現在にいたるまで米軍基地をめぐる負担を日米両国から強いられ続けてきた沖縄の差別と抑圧の歴史をたどり、住民たちが抱える怒りと失望の根源を探っていく。

（映画.com『沖縄 うりずんの雨』より）

【映画を見て】

ジャン・ユンカーマン監督の「監督の言葉」の中から、この映画の紹介をさせていただきます。

「沖縄の実態の一つは、この映画の英語タイトル"The Afterburn"が象徴しています。『アフターバーン』とは、炎が消えた後も火傷が深くなっていくことです。沖縄戦を体験した人々は、まさにそうしたトラウマと共に生きてきました。元米兵もそうです。元日本兵もそうです。そしてとくに、4人に一人が亡くなった沖縄の人々にとって、沖縄戦は今も続いているのです。

想像も付かないほどの戦争体験をした沖縄の人々は、一貫して戦争を拒絶してきました。米軍も沖縄戦では同じ血を流しました。しかし沖縄を『戦利品』として扱い、膨大な基地を建設。それらを拠点として、朝鮮、ベトナム、中東で戦争を続けてきました。平和を求める沖縄の文化と、戦争を選ぶアメリカの文化――。対極にある二つの文化が、狭い島に共存せざるを得なくなったのです。

何の武器も持たない沖縄の人々が、世界で一番強大な軍隊をもつアメリカに対して、反戦・反基地の闘いを始めました。そして1950年代の島ぐるみの闘争から、普天間基地の辺野古移設反対闘争まで、不屈の精神で闘い続けています。

私は1975年に初めてその精神に触れ、深い感銘を受けました。そして強い尊敬の念を抱きました。以来40年がたった今、不屈の精神はいっそう強固となり、さらに広がりつつあります。まさにそれこそが、私が世界に伝えたい、もうひとつの沖縄の実態です。私はそれをこの映画のタイトル『うりずんの雨』に込めたつもりです。

米軍基地を撤廃するためのたたかいは今後も長く続くでしょう。沖縄の人々は決してあきらめないでしょう。しかし、沖縄を戦利品としての運命から解放する責任を負っているのは、沖縄の人々ではありません。アメリカの市民、そして日本の市民です。その責任をどう負っていくのか、問われているのは私たちなのです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「私たちは沖縄のことをどれくらい知っているのだろう?」映画の案内チラシの裏面にもそう書かれていますが、正直、それが私の映画を観た時の偽らない気持ちでした。

日本国民、とくに本土の人間が観るべき映画です。安倍首相は是非、オバマ大統領と一緒に見て考えて欲しいと思いました。アメリカの市民にも見て考えて欲しい映画です。アメリカと日本いう国は70年以上もこのような歴史を続けてよい国なのかと。この映画によって、沖縄の戦争と、「戦後」と、いまを知ることを通してはじめて日本とアメリカの市民は、自分たちが何をしてきたのかを理解することができるのではないでしょうか。

映画を観て、私たちが戦後できないまま来てしまった「日本国憲法を実現し、自分たちのものにする闘い」が沖縄にこそあるのではないか、と思いました。

（シネマde憲法2015年4月27日『うりずんの雨』より）

【この映画をプログラムに選んだ理由】

沖縄戦と戦後の米軍基地と常に戦争にさらされてきた沖縄。そしていま進められている南西諸島の自衛隊配備などによって、これからもさらに戦争の危険に晒される沖縄。沖縄を考える映画をプログラムに入れたいと思いました。

実はこの映画は、2018年の「憲法映画祭」にも、プログラムに考えたのですが事情あって延期になっていました。2013年の第３回憲法を考える映画の会で上映した『映画日本国憲法』以来、何かとアドバイスいただいているジャン・ユンカーマン監督の作品です。

沖縄 うりずんの雨（改訂版）

監督：ジャン・ユンカーマン
企画・製作：山上徹太朗
音楽：小室等
製作：シグロ
2015年制作／148分／日本映画／ドキュメンタリー
上映問合せ：シグロ　TEL：03-5343-3101

資料❽　映画『教育と愛国』について

【映画の解説】

いま、政治と教育の距離がどんどん近くなっている。

軍国主義へと流れた戦前の反省から、戦後の教育は政治と常に一線を画してきたが、昨今この流れは大きく変わりつつある。2006年に第一次安倍政権下で教育基本法が改変され、「愛国心」条項が戦後初めて盛り込まれた。

2014年。その基準が見直されて以降「教育改革」「教育再生」の名の下、目に見えない力を増していく教科書検定制度。政治介入ともいえる状況の中で繰り広げられる出版社と執筆者の攻防はいま現在も続く。

本作は、歴史の記述をきっかけに倒産に追い込まれた大手教科書出版社の元編集者や、保守系の政治家が薦める教科書の執筆者などへのインタビュー、新しく採用が始まった教科書を使う学校や、慰安婦問題など加害の歴史を教える教師・研究する大学教授へのバッシング、さらには日本学術会議任命拒否問題など、大阪・毎日放送(MBS)で20年以上にわたって教育現場を取材してきた斉加尚代ディレクターが、「教育と政治」の関係を見つめながら最新の教育事情を記録した。

教科書は、教育はいったい誰のものなのか……。

（公式サイト『教育と愛国』introductionより）

教育は何より子どもたちの未来のためのもの、と考えたいのですが、この映画に描かれているこの25年あまりの教育の「施策」の魂胆を知ると、もっとも教育にふさわしくない人たちが、教育政策をほしいままにして歪めてきたと感じ、暗然とした気持させられます。残念ながら、教育だけでなく、すべての領域で人を大切にしない、未来はどうあったらよいかをまともに考えていない、そして自分たちの利益しか考えない政治が横行しているように思います。

この映画で、取りあげられている教育をめぐる事件や施策の中から、印象に残ったものを並べてみます。

・1996年「新しい歴史教育をつくる会」の発足、「つくる会」教科書の実態。「つくる会」系の教科書の特徴（神話・神道の紹介に力を入れる。南京事件に触れない。教育勅語を肯定的に捉えるなど）

・2006年教育基本法改訂「日本の伝統と文化を尊重する」と書き込む.愛国心条項を盛り込む。関東大震災での朝鮮人殺害の数字が消える。国連女性差別撤廃委員会での外務省審議官発言、慰安婦連行へ軍の関与は確認できない。

・2012年2月大阪での安倍晋三、松井一郎、「教育の現場を変えていく」発言。育鵬社教科書代表執筆者伊藤隆インタビュー「歴史から学ぶ必要はない」ほか。

高校歴史教科書から「沖縄の集団自決に日本軍が関与」の記述が消える

・2016年「学び舎」教科書への攻撃・抗議ハガキ、日本会議系首長などの暗躍。表現の不自由展（会場：エル・おおさか）開催。「右翼」の妨害行動。「反日の象徴」松井一郎、吉村洋文らが攻撃。公立中学校教諭平井美津子さんの記事に対する吉村洋文・府議会での攻撃、学校側の変節

・2017年、道徳の授業、教科書（教科書検定でパン屋が和菓子屋に変わった事件など）。中学校歴史教科書シェア1位を誇っていた「日本書籍」の倒産、その裏にあった攻撃。

・2021年菅内閣の教科書の言葉遣いへの直接介入。従軍慰安婦を慰安婦とする閣議決定。教科書記述への文部省「訂正申請」問題。

・慰安婦をジェンダー問題の研究対象とした牟田和恵教授の科研費をめぐる杉田水脈攻撃。「辺野古埋め立て反対への県民意思表示を国が否定するのは地方自治の危機」を訴えた岡田雅典教授を日本学術会議新会員任命せず。菅義偉首相の答えのはぐらかし。

このように並べていくと、その陰でこうした政策を動かしている勢力の、教育を自分たちにとって都合の良いものに変えていこうとしてきたものの意図が浮かび上がってきます。

映画はまた、教科書検定の実態や法律を変えて教育を変えていった目に見える、話題にされてきた部分とは別に、今まで行われてきた教育を問題にする「世論」形成の工作の実態、その組織的なやり方をも明らかにしていきます。

自分たちの「教育」を実現するために、その批判をするもの、そしてまた自分たちと意見の違うものをどのような方法で封じていくか、表には出てこなかったものが裏でつながっていることが見えてきます。

そうした工作によって彼らが何に反対し、教育をどのようにしようとしているのか。それはつまり、戦争での敗戦や加害責任を認めず、戦前のような政治体制に戻そうとするだけでなく、子どもたちに、つまり未来の日本人にそうした政治に従うことを強要させようとしているものなのでしょう。つまりは戦争できる国づくり、それに従順に従う国民を「教育」しようとして、それを着々と実現してきたということなのでしょうか。

個々の事件や施策については、その時々取りあげられ批判もされ、その横暴で陰湿なやり方に私も憤ったりしてきたことも覚えています。憤慨はしても、ことが表面から見えなくなると忘れてしまうことが多かったと思います。しかし、それを進めようとする政治は、着々とそうした「教育」を実現していった事実に愕然とします。こうしたことはこの教育問題だけでなく、とくに安倍政権の2010年代、市民の運動に対しての組織的な圧力や圧迫として様々な形で行われ分断されてきたことにあらためて気付きました。

これから始まるであろう改憲のための具体的な動きの中でもそうしたやり方がますます続けられるのでしょうか。そして多くの国民は、深く考えず、批判もせずに受け入れてしまうのでしょうか。

それにしても目先の利益だけを追い、つまり批判や反対するものを黙らせる為にやっていることが、客観的、科学的に判断していくことや学術研究の科学性も壊し、きちんとした論議を経て政治政治を行うことをも壊し続けていくことに、政治家自身気付いていないでしょうか。

この映画の監督が、パンフレットに書かれていることが身にしみます。

「教育は誰のためにあるのか、史実とどう向き合えば良いのか。その問いは、右や左といったイデオロギーとは一切関係がない。いかなる政党であっても教育と学問の自由を侵してはならないのだ。これらの価値は、世界の国々でおびただしい犠牲をはらって築かれたものだと私は思う。」そうしてこのパンフレットの巻末には、憲法の条文が記されています。「日本国憲法第23条　学問の自由は、これを保障する。」

（シネマde憲法2022年５月23日『教育と愛国』より）
https://www.jicl.jp/articles/cinema_20220523.html

教育と愛国

監督：斉加尚代
語り：井浦新
2022年制作／107分／日本映画／ドキュメンタリー
公式サイト：https://www.mbs.jp/kyoiku-aikoku/
上映貸出：きろくびと　TEL:03-6434-9346

資料❾-１　講演「憲法9条というリアリズム」愛敬浩二さん

憲法9条というリアリズム

はじめに――「リアリズム」という視点
「私もこの『理想主義』にもとづく9 条擁護論の重要性を認めることにやぶさかではない。しかし、私はここで改憲派の『現実主義』に9条の『理想主義』を対峙させるのではなく。現代の国内政治・ 国際政治における『9条の効用』を明らかにし、いま『護憲』であることこそ、『現実的』なのだと論じてみたい」(愛敬浩二『改憲問題』〔ちくま新書、2006 年〕の表紙に引用された文章)

1 憲法 9 条は「理想論=非現実的」か?
(1)政治家の 9 条「お花畑」論
①細野豪志(自民党)「ウクライナに憲法9条があったらロシアの侵攻はなかったか。.....残念ながら答えはノーだろう」(2022/02/24 のツィート)
②馬場伸幸(日本維新の会)「いまだに自衛隊は違憲だと主張され、水戸黄門の印籠よろしく、現行の憲法9条をかざせば敵も斬りかかってこないと思い込んでいる方々がいらっしゃいます。理想論 で国や国民を守ることはできません。それこそ日本に牙をむく周辺諸国の思うつぼです」(衆議院憲 法審査会 2022/04/14)

(2)ある高校の学園祭の討論会での経験 (2005 年頃)

2 憲法9条の制定経緯――国際環境下の「リアリズム」
(1)国際的環境
①大西洋憲章(1941/08/12)とカイロ宣言(1943/11/27)
　➡ドイツ・日本の武装解除
②国連憲章の武力行使禁止原則(2 条 4 項)と「敵国条項」(107 条)
③ポツダム宣言(1945/07/26)12 条「日本国民の自由に表明せる意思に従ひ平和的傾向を有し且責任ある政府が樹立せらるるに於ては、聯合国の占領軍は、直ちに日本国より撤収せらるべし」

(2)「マッカーサー3原則」(1946/02/03)
①第2原則(原案)「国権の発動たる戦争は、廃止する。日本は、紛争解決のための手段としての戦争、さらに自己の安全を保持するための手段としての戦争をも、放棄する。日本は、その防衛と保護を、今や世界を動かしつつある崇高な理想に委ねる。日本が陸海空軍をもつ権能は将来も与えられることはなく、交戦権が日本軍に与えられることもない」
②日本側に示された総司令部案(1946/02/13)➡下線部を削除したものを提示
③9条の発案者➡幣原喜重郎か、マッカーサーか?

(3)憲法9条の成立
①総司令部案を受入れた日本政府は総司令部との交渉を経て、憲法草案を帝国議会衆議院に提出した(1946/06/20)
②衆議院の審議の際、1 項冒頭に「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し」、2 項冒頭に「前項の目的を達するため」という文言が追加された(芦田修正)
③制憲議会(第90回帝国議会)における政府答弁➡非武装平和主義の立場

(a)9 条1項は直接には自衛権を否定していないが、2 項が戦力不保持と交戦権否認を定めた結果、「自衛権の発動としての戦争」も放棄した(1946/06/26 衆院本会議・吉田茂首相)
(b)近年の戦争の多くが「国家正当防衛権」によって行われたことは顕著な事実であり、それを認めることは有害である(1946/06/28 衆院本会議・吉田茂首相)
(4)憲法9条の「空白地」としての沖縄
日米国人記者団との会見でのマッカーサーの発言(1947/06/27)
「沖縄諸島は、われわれの天然の国境である。米国が沖縄を保有することにつき日本人に反対があるとは思えない。なぜなら沖縄人は日本人ではなく、また日本人は戦争を放棄したからである。沖縄に米国の空軍を置くことは日本にとって重大な意義があり、あきらかに日本の安全に対する保障となろう」(中野好夫・新崎盛暉『沖縄戦後史』〔岩波新書、1976 年〕14-15 頁)

3 日米安保体制下の憲法9条――「見たくない現実」を直視する
(1)日米安保体制という「所与」
①在日米軍を勘定に入れれば、戦後日本が非武装であった時期は存在しない
②核保有国が対峙する冷戦の最前線で一方の側に従属的にコミットしてきた
*1950 年代の在日米軍が起こした事件
Cf. 山本章子『日米地位協定』(中公新書、2019 年)、吉次公介『日米安保体制史』(岩波新書、2018 年)
(a)ジラード事件(1957年):群馬県相馬が原演習場で薬莢拾いをしていた日本人女性をジラード三等兵が呼び寄せて射殺した事件。米軍は公務中を理由に一次裁判権を主張したが、世論に押されて 日本の裁判権を承認。前橋地裁で懲役3年執行猶予4年の判決(傷害致死罪で起訴する日米間の密約あり)
(b)ロングプリー事件(1958 年):ジョンソン米空軍基地(現在は自衛隊入間基地)内から米兵が西武新宿線の走行車両に向かって発砲し、乗客一名(大学生)が死亡した事件。米軍側が一次裁判権 を放棄したので日本側で裁判(禁固 10 ヵ月)。

(2)日米「同盟」の本質
「日米安保体制を軸として、日本を西側陣営に固く結び付け、対ソ前進攻撃・補給基地として使用する権利を確保し、他方では日本防衛コミットメントを避け、財政負担を軽減していくという米国の基本戦略にとって、都合の悪いシナリオは三つあった。第一は、日本が自由主義陣営から離脱し て中立化し『非武装』路線をとること、第二は、外交的独自性を保持しつつ『自主防衛』路線をとること、第三は、日米安保体制を堅持しつつ防衛を全面的に米国に依存する路線をとることである」 (室山義正『日米安保体制(上)』〔有斐閣、1992 年〕172-173 頁)。

(3)日米「同盟」における「entrapment」と「abandonment」の危険性
①劣位の同盟国は abandonment(捨てられること)を怖れて、優位の同盟国の戦争に必要以上に 積極的な貢献をしようとする(entrapment 罠にかかる)危険性がある。
cf. マイケル・シーゲル『憲法第9条に関する一考察』(南山大学社会倫理研究所)
②優位の同盟国は状況次第では、劣位の同盟国をabandonする(太平洋戦争中のイギリスとオー ストラリア)
*第一次世界大戦中、オーストラリア兵はガリポリの戦い(ダーダネルス海峡の西側の半島)で戦死 8,709 人、戦傷 19,441 人。

③「北朝鮮危機」(2017 年)と日米「同盟」
(a)小野寺五典・防衛大臣(2017/08/10 衆院安保委)「個別具体の話は控えるが、一般論で言えば、日本と米国の役割分担がある。日本は『盾』の役割で守り防ぐ。打撃力をもって抑止力を高めるのか米国の役割だ。この役割双方があって日本の抑止力が高まることを考えると、日本の安全保障にとって、米側の抑止力・打撃力が(攻撃を受けて)欠如することは、日本の存立の危機に当たる可 能性がないとはいえない」
(b)トランプ米大統領「北朝鮮のミサイルを日本は迎撃すべきだった」、「自国の上空をミサイルが通過しているのに、なぜ撃ち落とさないのか」、「武士の国なのに理解できない」(中日新聞 2017/11/05) *安倍首相はトランプ大統領をノーベル平和賞に推薦(本人が暴露したため衆院予算委員会で暗黙裡に認める答弁)「首相ご機嫌取り必死トランフ平和賞推薦」(中日新聞 2019/02/19 朝刊)

資料❾-２　講演「憲法9条というリアリズム」愛敬浩二さん

4 戦後憲法政治における「自衛隊違憲論」の意義と効用
(1)戦後憲法政治における「自衛隊違憲論」の意義
「戦後憲法学は、『非現実的』という非難に耐えながら、その解釈論を維持してきた。……その際、 過少に見てならないのは、そういう『非現実的』な解釈論があり、また、それと同じ見地に立つ政 治的・社会的勢力……があったからこそ、その抑止力の効果を含めて、現在かくあるような『現実』 が形成されてきたのだ、という事実である」(樋口陽一「戦争放棄」同編・講座憲法学 2 主権と国 際社会〔日本評論社、1994 年〕129 頁)。

(2)「7・1閣議決定」前の政府見解を評価する視点
*7・1閣議決定:安倍内閣は「集団的自衛権の行使は憲法9条違反」という従来の政府解釈を閣 議決定によって変更した(2014 年)。変更後の政府解釈に基づいて安保関連法が制定され、「存立危 機事態」における集団的自衛権行使が可能になった(2015 年)。
①従来の政府見解は、日本国憲法の平和主義の画期性(特に9条2項の「戦力不保持」)を認めるからこそ、個別的自衛権行使を合憲とし、集団的自衛権行使を違憲としていたこと。
②政府見解は、明文改憲を実現できなかった政府が、冷戦という厳しい国際環境の下で、国民の平和意識・憲法感覚の一定の定着と平和運動の高揚と対峙しつつ、具体的な要請に即して作り上げてきたもの。
③政府見解の骨格は、55 年体制下の国会で3分の1程度の議席を確保していた「護憲派」の野党議 員による精緻で執拗な質問への答弁を通じて形成されたものであること。

(3)戦後憲法政治における「自衛隊違憲論」の効用
①1960 年安保闘争の際、岸信介首相の自衛隊出動要請を赤城宗徳防衛庁長官が拒否
cf. 内田健三『戦後日本の保守政治』(岩波新書、1969年) 158-159 頁。
*中曽根康弘(岸内閣の科学技術庁長官)「自衛隊は国家国民の自衛隊であり、一政権のための自衛隊にあらず。とくに岸家の用心棒ではない。こんなときに出動して、成長途上の自衛隊が国民の反感を買えば、将来、これが回復に如何なる努力を要するか、自衛隊制度自体が崩壊する」(同著『天地有情』文芸春秋社1996年)
Cf. 渡辺治「高度成長と企業社会」同編『日本の時代史 27 高度成長と企業社会』(吉川弘文館、 2004 年)
②中国:天安門事件(1989年6月)、韓国:光州事件(1980年5月)→市民と軍隊の衝突
③ベトナム戦争と韓国軍:米国に次ぐ32万人を派遣。死者5000 人、負傷者 1 万人

5 「敵基地攻撃能力」・南西諸島「防衛」・「台湾有事」
(1)議論の前提
①現行法制の下、「存立危機事態」を認定できれば、自国に対する武力行使がない時点で、自衛隊は 軍事的に反撃できる。
②現時点での岸田政権の説明は曖昧だが、関係者の発言や自衛隊の運用を前提にすると、「台湾有事」 が「存立危機事態」に該当することは当然視されている。

(2)「(安保の行方 敵基地攻撃)日本の防衛「盾」から「矛」へ?」(朝日新聞 2022/10/23 朝刊)
「南西諸島に位置する陸上自衛隊奄美駐屯地。周辺で軍事活動を活発化させる中国をにらみ、3 年 前に新編されたばかりの駐屯地に日米双方のミサイル部隊が展開した。九州各地で 8 月 14 日から 9 月 9 日まで行われた日米共同訓練の一環だ。
……奄美は、中国が独自に設けた軍事防衛ライン「第1列島線」に近い。フリン司令官らの後方 には米陸軍高機動ロケット砲システム「ハイマース」と陸自地対艦ミサイル「12 式地対艦誘導弾」 が並んだ。陸自12式は、現在は射程約200キロだが、防衛省は射程を1000 キロ超に延ばす方針を決め、 量産化の経費も 2023 年度予算で要求。艦艇や戦闘機から発射する改良も検討している。
　これらが奄美などに配備されれば、中国本土の一部も射程に入る。日本が敵基地攻撃能力の保有 を宣言すれば、その一翼を担う」。

(3)政府解釈・防衛政策の専門家(元官僚)の発言
①宮﨑礼壹(元内閣法制局長官)「これまでのアフガニスタンやイラク等と違い、中国は強烈な反撃能力を持つ国である」(「台湾有事と集団的自衛権」世界 2022 年 7 月号)
②柳澤協二(元防衛省幹部)「中国との戦争では、自衛隊が海外で戦うのではなく、日本国内がミサイルの飛び交う戦場になります。ミサイルは、自衛隊だけ狙ってくるわけではありません。「とこまで犠牲に耐えるのか」という問いは、自衛隊に限らず、日本国民全体の問題になっていきます」(柳澤協二ほか『非戦の安全保障論』集英社新書、2022年)

(4)ナンシー・ペロシ米下院議長の「訪台」(2022年8月)
*11 月の米中間選挙
①佐橋亮(東京大学准教授・国際政治学。朝日新聞 2022/08/04 朝刊) 「台湾や地域の情勢の中で考えると、今回のペロシ氏の訪台が本当に必要だったのか疑問だ。. ….. ペロシ氏の訪台で、米中関係は明らかに悪い方向に向かう。地域の安定を米国が壊しかねない。日本や台湾からすると、この訪問はあまり意味がない」
②尾上定正(自衛隊元空将。朝日新聞 2022/08/06 朝刊)
「台湾に対して米国が関与のメッセージを示したことは政治的に意味があったのだろう。しかし、軍事的に評価すれば、はるかにマイナスの方が大きい。今後は、台湾を囲んだ演習を常態化させる恐れがある」

全国憲法研究会「憲法記念講演会」ご案内（2023年5月3日・東京大学本郷キャンパス）愛敬浩二さんからのご紹介

資料⑩　映画『ある戦争』について

【映画の解説】

過去の戦争をテーマにした映画ではない。長年紛争の続くアフガニスタンへ、平和維持軍として派兵を続けているデンマークの治安部隊の隊長クラウスの物語だ。この映画が衝撃的なのは、日本も起こり得るかもしれないという怖さだ。平和維持という名目で、自衛隊の海外派遣が安保法制で認められ、現地に派遣されると、戦争に巻き込まれ、加担する場合もある・・・。そんなことが頭の中をよぎる。

現地の駐留兵士たちは、タリバンの襲撃から民間人を守るため、無作為に地雷が埋め込まれている地域で命懸けの巡回を続けるなど、精神的に追いつめられる日々を過ごしていたが、ある日巡回中に一人の兵士が地雷で両足を吹き飛ばされ、殉死する事件が起きた。それをきっかけに不満を爆発させ、パニックを起こす兵士らに対し、クラウスは、「明日からは俺も巡回に同行する」と宣言し、隊長として自ら動くことで、国から与えられた使命の重要さを示し、部下たちの士気を高めようとしていた。

そんな折、クラウスにPID〈敵兵の存在確認〉がないまま空爆を命じ、現地の第６地区に住む11人の民間人を殺害したという容疑がかけられ、デンマークに強制帰国を命ぜられ、軍事法廷に起訴される。

後半の裁判シーンは検事と弁護士の追求が圧巻で、圧倒的に国側（軍の検事）に有利な展開となっていた。だが、双方の意見に真理があり、観る側は「有罪」か「無罪」か、裁判の傍聴席にいるような緊迫感を覚える。判決が下された結果感じるのは、＜戦争と犯罪の境界＞、＜正義と命の尊さ＞だ。

登場人物は善意の人ばかり、しかし平和のためと言いながら、戦争はこんな残酷な悲劇を引き起こすのだということが心に重くのしかかる。

（シネマde憲法：2016年10月14日『ある戦争』より）

【ストーリー】

長年紛争の続くアフガニスタンへ、平和維持軍としての派兵を続けているデンマーク王国。現地の駐留兵士たちは、タリバンの襲撃から民間人を守るため、無作為に地雷が埋め込まれている地域で命懸けの巡回を続けるなど、精神的に追いつめられる日々を過ごしていた。ある日、巡回中に一人の兵士が地雷で両足を吹き飛ばされ、殉死する事件が起きた。それをきっかけに不満を爆発させ、パニックを起こす兵士らに対し、駐留軍の隊長を務めるクラウス（ピルー・アスベック）は、「明日からは俺も巡回に同行する」と宣言する。隊長として自ら動くことで、国から与えられた使命の重要さを示し、部下たちの士気を高めようとしていたのだ。

一方、母国デンマークでは、クラウスの妻マリア（ツヴァ・ノヴォトニー）が、まだ幼い3人の子供を懸命に育てていた。その日は定期的にクラウスが衛星電話で、家族に電話をかけてくる日。家族も父からの電話を心待ちにしていたが、今夜はかかってこなかった―。

ある日、以前に部隊が助けた民間人の家族が、基地に避難場所を求めてやって来た。彼らは「あなた方は昼間にパトロールしているが、タリバンは夜にやってくる。奴らに協力しないと家族もろとも殺される。助けて欲しい」と告げる。クラウスは、「明日、もう一度パトロールに行く」と約束し、その日は家に戻るよう、家族を説得するのだった。だが、翌日、パトロール部隊を率いてその家を訪ねたクラウスたちは、惨殺された家族の亡骸を発見。クラウスは自分が家族を見殺しにしたと落胆する。しかしその直後、クラウスたちは突如として何者かの攻撃を受ける。一体、敵はどこから攻撃しているのか？敵の位置を掴めぬまま、民家の敷地内で追い詰められる部隊。首に被弾した部下ラッセもすでに虫の息だ。攻撃は閉鎖されている西の第6地区からのようだが、敵兵の視認ができない。「このままでは全滅する。」そう考えたクラウスは、敵が攻撃してきていると思われる第6地区への無線での空爆要請を部下に命ずる。

2分後、周囲に轟く爆撃音の後、敵からの攻撃をしのいだクラウスたちは、傷ついた部下を連れて、何とか基地への帰還を果たす。

数日後、基地から司令官と法務官がやって来る。理由は、クラウスの軍規違反だという。先日の襲撃事件でクラウスが命じた空爆の結果、子供を含む11人の罪無き民間人の命が失われていたのだ。司令官命令で強制帰国を命じられたクラウスは、一人デンマークに帰国する。

突然の帰国を喜んだのはクラウスの家族。マリアと3人の幼い子供たちに、しばしの安堵の時が訪れる。特に父の不在を寂しがり、問題ばかり起こしていた長男ユリウスも、この時ばかりは喜びを爆発させるのだった。

後日、クラウスとマリアは、弁護士のマーティン（ソーレン・マリン）から、クラウスはPID〈敵兵の存在確認〉がないまま空爆を命じ、現地の第6地区に住む11人の民間人を殺害した容疑で軍から起訴されたと知らされる。しかも有罪ならば、4年間の懲役だという。マリアは涙ながらにクラウスに「子供たちにはあなたが必要よ」と訴える。軍事法廷が開廷し、守るべき家族に対する将来への不安と、罪の意識に苛まれるクラウスに、軍の法務官は、容赦ない質問を投げかける。

果たして、クラウスと家族に待ち受ける未来とはー。

（公式サイト『ある戦争』ストーリーより）

ある戦争

監督＆脚本：トビアス・リンホルム
出演：ピルー・アスベック／ツヴァ・ノヴォトニー／ソーレン・マリンほか
2015年制作／115分／デンマーク
公式サイト：www.transformer.co.jp/m/arusensou/
上映問合せ：トランスフォーマー：TEL:03-5457-7767